

## JASMIM 2022 年度大会参加報告

三宅 珠穂

三宅珠穂音楽教室，神戸大学大学院博士課程前期課程

2022年11月26日，27日，京都精華大学にて実施予定だった第14回大会は，3度目のオンライン実施に変更となった。第1回から参加しているが，回を重ねるごとに内容が充実してきており，今大会も多く示唆を得ることが出来た。大会テーマは，「エレクトロニクスと即興」である。

1日目，研究発表1．有山大地（安藤大地，串山久美子）氏による「『童話読み聞かせのための絵本型劇伴エフェクタ』によるエレキギター即興演奏」では，プロの即興演奏家が，ステージで過去のフレーズを引用しがちだという問題意識から，新規フレーズを開拓したくなるように，エフェクタ機能を絵本型エフェクタに任せギタリストはフレーズづくりに専念させることと，絵本の朗読と共演することにより，フレーズ創作への影響をプロとアマで比較している。即興演奏導入時に枠や制限を設ける人は多いが，プロの即興演奏家に制限を設けた効果を検証した点が興味深かった。

研究発表2．寺内大輔氏による「小学校におけるプログラミング教育と即興」では，音楽科におけるプログラミング教育が＜音による構造物＞作りに偏っており，＜演奏行為の集積＞としてのプログラミング教育に即興演奏が重要であることが述べられた。若尾裕氏から「汎用性を高くした理論化ができるのではないか」との提案がなされ，ぜひ実現してほしいと感じた。

研究発表3．田中順子氏による「シュルレアリスムは心の問題を解決するか？ —リハビリテーション領域における芸術活動の課題—」では，実験的音楽を用いた継続的ワークショップ“イムズミュージック”の活動が紹介された。プロのミュージシャンがファシリテーターを務め，毎回，異なる実験的音楽を行う。参加者の変化についての報告もなされた。リハビリテーションは理論モデル（医学モデルや個人モデル）だが，“イムズミュージック”は社会モデルであること，また，リハビリテーション領域の課題は自由度が低いことが指摘された。プロのミュージシャンを起用した理由は，「作業療法士，音楽療法士はアートの完成が難しい。協調性を大切にして，アートを，秩序や勤勉に考えてしまう。プロミュージシャンからは，思ってもみない活動の提案，発想の自由がある。」とのことで，これからのコミュニティ音楽について，色々と考えさせられた。

特別企画, Ableton 社認定トレーナー日栄一真氏によるレクチャー「コンピューターを用いたサウンド表現の実例と即興演奏の可能性」では, DJ に即興性が必要であるという話から始まり, Ableton Live が多くの DAW (Digital Audio Workstation) と比べて, 音を如何に即興的に変化させやすいかについて, 解説と実演が行われた。中学・高等学校での教育実践事例も紹介された。今後も教育現場での活用が期待される。

基調講演は, dj sniff (水田拓郎) 氏による「電子楽器・即興・触覚性～STEIM 電子楽器スタジオでの楽器制作と 遠隔即興の先に見えるもの」で, IRCAM (フランス) などの作曲家を頂点としたヒエラルキーとは一線を画した, STEIM (オランダ) 独自の電子楽器作りと作品制作の姿勢が多くの資料と共に紹介された。STEIM の理念は, LIVE 性や手の感触を重視した独自性を持っており, 即興演奏との関わりが非常に深い。電子音楽が面白くあるためには, 人間的な部分 (即興) が鍵であると感じた。

2 日目, 演奏発表 1. 相馬聡文氏による「量子的な関わり合いをカタチにする即興的音楽生成パフォーマンス」では, 同氏の昨年度の大会での研究発表「量子的アルゴリズムに基づく即興的音楽生成の可能性に関する一考察」の量子もつれ理論を基に作成された, ライブコーディングプログラムによる実演が行われた。「複数の人がお互いに影響を与え合って音楽を作る」という状態を可能にするプログラムで, 今回は発表者一人による実演であったが, 複数での実演だとどうなるのかにも, 興味が湧いた。

演奏発表 2. 川口賢哉氏による「海童道による即興の試演」では, N.Y. の Creative Music Studio で海童道 (わたづみどう) を道祖から学んだ発表者による解説と演奏が行われた。海童道では, 「本曲 (道曲) の型を覚えて, 曲を忘れていくための方便をする」とのことであった。型を覚えるところからスタートするところは, 一見, jazz や民族音楽の即興演奏に似ているように感じたが, 演奏中の意識の持ち方が全く異なっているようであった。音型などではなく修行や悟りから即興的に演奏する, 世阿弥の「離見の見」の意識だそうだ。筆者は, そのことにより, 音楽に囚われず, より精神が自由になれるのではないかと推察した。海童道の即興演奏は, 西洋音楽で育っている演奏家には, 様々な示唆がありそうである。

研究発表 4. 田中路氏による「学校教育における即興の段階的指導に関する一考察—J. Kratus “7 levels of Improvisation”の日本への応用可能性—」は, アメリカの音楽教育学者 Kratus による即興演奏教育の 7 段階を, 日本の小学校教育にどう生かすかという発表であった。質疑応答時に, 人によって, 即興演奏教育に関する考え方がかなり異なっていることが浮かび上がり, 重要な議論だと感じた。

研究発表5. 瀧戸彩花氏による「AIやIoTを活用した音楽・楽器が人々の感覚や身体に与える影響とその可能性に関する一考察」では、落合陽一と東京フィルハーモニー交響楽団による「耳で聴かない音楽会 Vol.1」で、AIやIoTがどのように活用されたか、また観客の反応についての発表であった。音を耳以外（主に、視覚と触覚）でも感じる試みで、多くの可能性を含むと感じられた。

研究発表6. 井上春緒氏による「インド実験音楽の可能性—二重に周縁化されたノイズ」は、インド実験音楽・ノイズ音楽を、欧米の音楽からではなく、アジアの視点から捉えるという試みであった。音楽のみならず、政治的、社会的な視点でも捉えており、また、その大変興味深い音楽やアーティストが多数紹介された。

交流会の代わりに開催された「JASMIM マッチングプログラム マッチングプロジェクト」では、今後の学会への要望や展望が熱く議論された。会員が要望やニーズを表明することで学会も変化していくことを、改めて意識した。

今大会は、テーマが「エレクトロニクスと即興」なので、電子音楽やプログラミングの知識が無ければ楽しめないかと思いきや、そのような知識の乏しい筆者にとっても、充実感のある大会であった。各発表は勿論のこと、様々な楽器やプログラムを制作することも、自分のやりたい音楽表現の実現のためだということが実感でき、新たな知識を得られる喜びにあふれた濃い2日間であった。